



TITLE:

スイカと人間 : '95年1月号編集後記
に対する補足

AUTHOR(S):

K. Y.

CITATION:

K. Y., スイカと人間 : '95年1月号編集後記に対する補足. 物性研究 1995,
64(1): 107-107

ISSUE DATE:

1995-04-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/95530>

RIGHT:

ひろば

スイカと人間

— '95年1月号編集後記に対する補足—

K. Y.

(1995年4月5日受理)

本誌3月号に松田博嗣氏の「賞公害をどう防ぐか」と題する御意見が掲載されている。深く考察された内容で興味深く拝見した。

ただ、私の説明不足から、私が「スイカにラベルが必要でない」と主張していると理解されている点が意外であった。心配になって編集会議で皆さんに確かめるとそのように理解したとのことで、私の表現の不適切さの結果であることが判明した。その点、補足説明させていただきたい。

私は播州の農家の出身で、子供の頃スイカの出荷の手伝いをした。専門家が畑をまわり、熟したスイカにスタンプを押していく。それにラベルを貼って出荷するわけである。専門家は見ただけでわかるというが、同行した私にはたたいても全く区別ができなかった。スイカの価値はその味にあり、ラベルで産地や甘さを表示する必要がある。

しかし、人間の価値は研究業績のみで決まるものではない。しかも、その研究業績の評価が難しい。賞というラベルは人間をスイカのように扱うことになる。人間は人間として、真の実力で評価されるべきである。久保亮五先生はノーベル賞は授与されなかったが、若い頃の先生の文章を見ると学問に対するすさまじい迫力を感じる。やはり、日本の物理を担った偉い先生だと思う。

大江健三郎氏はノーベル賞をもらったが、彼の小説は特別すぐれているとは思えない。これは私の偏見だと思うが、夏目漱石の方がずっとすぐれているように思う。研究や小説の価値判断は多様であり、論文賞などで画一的に決定せず、私は個々の研究者の判断にまかせるのがよいと思う。